【優秀賞】

【日本の水の恵みは持続可能なのか】

名古屋女子大学中学校　三年　　大和田　典子

私の祖父母は、美しい里山の住人です。屋号を池下と言います。昭和三十年頃まで裏山に池が有った事から呼ばれています。家の周囲には、水路や井戸が有り、田んぼの時期になると、沢の水が水路に流れ出ます。コトコトと音を立てながら勢い良く流れる水音が好きです。水辺では蛍や様々な生物達が活発に活動する時期です。蛙はとても不思議でいつも鳴いてると思っていましたが、一匹が鳴き出すと大合唱が始まります。そしてぴたっと静寂が訪れます。面白いです。一番のお気に入りの景色が有ります。それは、代かき後に田んぼが水鏡になり、周りの景色が映り込み、田んぼ一つ一つが、パズルのピースの様になります。空の色が時間と伴に変化していく様は絶景です。薫風も感じ心が穏やかになります。この絶景を眺めたのは、令和元年の大型連休でした。祖父母の所には、お盆やお正月に訪れる程度でした。

祖父母は共に、昭和十年代生まれで、八十歳前後になります。畑を五町歩（東京ドーム一個分）陸稲や大麦を耕作し、田んぼを二町五反歩と畑の半分程耕作しています。大型機械を利用していますが、祖父母だけでは大変になってきています。どちらかが体調を崩したら耕作を諦めるしかないなと聞く機会が増えています。少しでも役に立ちたいと思い田植えを手伝いに行きました。

いざやってみると、とても難しく、体中が痛くなる重労働でした。まず、田んぼを歩くのが難しく、長靴も重く感じました。私は、端を任されたのですが、真っ直ぐに植えるのが、列を振り返ると難しく、浮いている苗を見ると情け無く感じました。それでも、四日目にもなると少し上達してきて、祖父母にほめられてうれしくなりました。毎年手伝うと約束しましたが、コロナ禍でそれ以来、訪れる事すら出来ていません。とても残念で寂しいです。

そして、昨年には、以前から恐れていた事件が起こりました。民家周辺の田んぼが猪に荒らされてしまいました。稲穂が垂れ始めた時期で、祖父母は落胆していました。収穫量の減少とコロナ禍での新米価格も下落し、農家が廃業したニュースも聞きました。

祖父母の住む里山でも、高齢化や継承者不足で耕作放棄地が増えてきています。山間部の田んぼは数年前から、猪の被害を受けていて、あぜも土手も道も破壊され、耕作放棄地となっています。そこを住処として、里山に出没する様になりました。対策は、電気柵を使用します。農地を電気柵で囲うので費用が掛かります。管理も必要です。稲作は、水の管理や草切りがとても重要です。そこに、野生動物とのたたかいも加わり、負担ばかり増えて収入がマイナスなら、生産者の苦悩は計り知れません。放棄地が増加していきます。

農地減少は、農地が持つ様々な機能が失われていきます。農地は作物を作るだけではありません。雨水を蓄え、時間を掛けて地下水となり、ゆっくり下流へ流れ生活用水などに活用されています。洪水や土砂崩れを防いで良質な水を作っています。水田では蒸発、作物の蒸散により、空気を冷やし、周辺市街地の気温上昇を抑えます。継続的な耕作が、多くの生き物の生態系が保たれる事につながっています。

森や山林の保全、里山の保全はとても重要です。日本は、耕作できる土地を自ら手放し輸入に頼っています。飢餓で苦しんでいる国に申し訳ない気持ちになります。日本でも保全活動に国民が関心を持たなければ、蛇口から安全な水が供給されていた事があると言う未来になってしまうでしょう。

今の私にできる第一歩は、水の恵みを守る為に保全活動に関心を持ち、第一次産業を支援できるように、地産地消を心掛けて行くことだと思います。